

2013年9月12日

新潟地方裁判所第2民事部合議係 御中

大賀 あや子

### 意見陳述書

2011年3月11日、私は福島第一原発から4.5Kmのアパートで、町内の7.5Km地点に新築した自宅への入居準備をしていました。

その日夜から、原発事故による避難が始まり、家も、仕事も、馴染んだ生活のほとんども失って、2年6カ月を超えました。

毎月11日には、原発事故のため弔いに伺えなかった津波被災死の友人や、これまでに故郷へ帰れないまま亡くなった友人たちを偲び、同じく亡くなった方々を想いながら、終わらない事故と被害の果てしなさを改めて思い、特に気持ちが落ち込みます。

たびたび余震が来る毎に、(これは震度3くらいか、4くらいか、次の瞬間もっと揺れるか、第一原発ではどれほどか!)と恐怖し、メルトスルーした原子炉や暫定冷却の燃料プールに何か異変が起きるかも知れないと考え、いつまた避難しなければならないかも知れないと身構え、緊急避難当時のことを思い出します。

私たち家族は情報を求めて隣町へ行く途中で最初の避難指示を知り、もう、地割れだらけの道に戻ってパンク交通妨害するリスクは冒せないと、自宅近所の方や我が家の飼い犬を助けることもできずに断腸の思いで避難開始をしました。それから毎日泣きながらTVを新聞を凝視して、原発の相次ぐ爆発の報道の合間に、避難した住民の情報を探していました。

まったく着の身着のまま、ちりぢりになり友人知人の行方もなかなか分かりませんでした。移転した町役場などで1か月後から隣人友人たちと再会し、お互いの体験を聴き始めました。幾度思い出しても涙が出るのはすぐ隣の地区の消防団の方です。原発から約30キロの体育館で3度目の爆発と屋内退避指示の報を受け、どれだけ効果があるかわからないが「みんな早く体育館の中へ入れ!」と呼びかけその重い扉を閉めた瞬間、はげしく死の恐怖を感じたといいます。その頃どれだけの初期被曝をしたかのデータはとても少なく、一生涯にわたる健康不安を抱えています。国会事故調査委員会タウンミーティングでの証言記録を、ぜひ視たり読んだりしてください。

避難当初の恐怖や不便もありましたが、それからずっと続いている避難生活に先の見えない辛さがあります。

避難先である福島県内各地、福島県外でも東北関東の広い範囲が汚染されました。目に見えない放射性物質が街にも田畑にも山にもすべて沈着し、放射能汚染された土地で暮らすということは、街を歩くにも、ものを食べるにも、窓を開けるのも、掃除洗濯にも、生活すべてが被曝の積み重ね、

どのていど気をつけるか選択の連続です。県内の TV ラジオでも毎日、各地の放射線量を報じ、新聞では県や国による食物の測定結果等々を載せています。県ホームページでは「風の強い日にはマスクを着用などするように」という注意掲載が続いています。農林水産物とくに春の山菜、秋のきのこは出荷制限摂取制限が頻発しています。目に見える自然は美しいままでも、近づき親しむことができません。

「除染」作業によって放射線量が下がっても、風雨によりまた沈着して放射線量が挙がってしまう例が多くあります。

子どもは大人より被曝による健康影響を受けやすいのに、十分な被曝予防ができていないことを、地域の大人の一人として最も申し訳なく思っています。100万人に1人の小児甲状腺ガンが県の調査で既に約40例報告されています。

放射能についての情報や判断、賠償を受ける立場、被害体験と情報、帰還できるかどうかの考え、それらの違いによって、県民どうし隣人どうしの溝・分断が発生しています。

同時に今なお、第一原発からの放射性物質の放出も止められず続いています。空へ毎時1000万ベクレル、海へは流出地下水が正確に把握すらされていません。

その現場で危険な作業にあたっている多くが地元の住民、わたしたちの近隣の方々です。

帰還困難区域に指定された私の住む大熊町の住民の多くが、帰って暮らすことはできないと、しかたなく考えるようになっていきます。東電の説明会、国の説明会、どこで質問が出てははっきりした答えはなく2年以上が過ぎました。今年6月の町議会一般質問で町長は、町民の帰還について、「場合によっては居住、帰還を諦めざるを得ない区域が発生する可能性があるかもしれない」「居住可能なまでに（除染の）目的が達成しても、それが遠い将来ならば、今を生きるわれわれにとって帰還できるということではない」と答弁しました。私は（元の放射線量近くに戻らなければ帰れない、それは数十年いや数百年かかる）と考えていて、町長の発言は遅すぎたが現実を認めたことは前進と思いました。しかしある晩、町内のやや少し線量の低い地区に帰って皆で田植えをしている町長さんもいるという夢を見ました。帰りたくないのではなく、帰れないのです。この心の葛藤も一生続きます。

そして現在の私の気持ちは、「私たちのような経験を、ほかの誰にも繰り返さないでほしい」とつきます。

東京電力が、原発を無事に運転し、万一の事故時に適切な対応をし、収束をし、住民が故郷へ戻れる、被害者への謝罪・賠償ができる、その時に国が住民を守る迅速十分な対応をすることができる、私たち福島県の被害者は、そうは信じられません。

隣の新潟県で原発再稼働のそんなリスクに向かっていることに、不安がいや増します。

東京電力の柏崎刈羽原発の運転を差し止めていただきますよう、心よりお願い申し上げます。